

平成25年度第3回新しい豊かさ協創プロジェクト推進会議 「県民力を高める絆づくり協創プロジェクト」の概要について

平成25年度第3回新しい豊かさ協創プロジェクト推進会議「県民力を高める絆づくり協創プロジェクト」を平成26年3月13日に開催しました。

推進会議には、5名の委員にご出席いただくとともに、会議の進行を補助するファシリテーターとして特定非営利活動法人Mブリッジ理事長の米山哲司氏にご出席いただきました。なお、推進会議の概要は、以下のとおりです。

「県民力を高める絆づくり協創プロジェクト」第3回出席委員及びファシリテーター

※敬称略、50音順、カッコ書は役職

川北 輝（特定非営利活動法人津市 NPO サポートセンター理事長）

小堀 正一（三重県視覚障害者協会会員）

高橋 幸照（水土里ネット立梅用水事務局長）

舛本 大輔（国立大学法人三重大学大学院医学部院生）

宮本 倫明（「美し国おこし・三重」総合プロデューサー）

<ファシリテーター>

米山 哲司（特定非営利活動法人Mブリッジ理事長）



<推進会議の進行概要>

会議の大まかな進行は次のとおり

開会 15:00
戦略企画部長あいさつ

- 1、推進会議の状況について
 - ・第2回推進会議（平成25年度第2回）の概要
 - ・新しい豊かさ協創プロジェクト推進会議（全体）の状況
- 2、平成25年度事業概要進捗（平成25年度事業実績）及び平成26年度当初予算（案）取組概要について
 - ・プロジェクト事業概要（H25年度事業実績）
 - ・平成26年度当初予算選択・集中プログラム取組概要
- 3、共通テーマ（意見交換）
 - ・中間支援組織の「機能」と「あり方」
 - ・情報受発信の強化
 - ・連携・マッチングの強化

閉会 17:00

（戦略企画部長あいさつ）

山口和夫戦略企画部長から、今回の会議での目的等について説明いたしました。

- 1、推進会議の状況について
 - ・ファシリテーターの米山さんから平成25年度第2回の概要を説明いただきました。
 - ・新しい豊かさ協創プロジェクト推進会議（全体）の状況を事務局より説明しました。
- 2、平成26年度当初予算編成に向けての基本的な考え方について
 - ・「事業概要進捗（平成25年度事業計画）と平成26年度当初予算選択・集中プログラム取組概要について事務局と担当課から説明しました。

委員から出された主な意見は、以下のとおりです。

(障がい者芸術文化祭について)

障がい者芸術文化祭は、絆、協創の意味では、障がい者団体の連携もとれ、事業展開も良かったのだが、三重県の障がい者芸術文化祭と三重県の県展(美術関係)とを結ぶ中間支援組織は存在するのだろうか。三重県が行う県展に障がい者が入っていけるような部門ができないだろうか。

(NPOの活動を支える仕組みづくりについて)

NPO班には600団体を超えるNPO法人の情報が入ってくる。本来であると県から地域のニーズとかシーズを汲みとるための入口であり、とても大事なセクションである。しかし、平成26年度の予算もかなり縮減されるようで、既存事業の中での対応や災害ボランティアだけの対応になってしまった感がある。NPO班の本来の有り方を示してほしい。

3 共通テーマ

『中間支援組織の「機能」と「あり方」について』の意見交換

ひとつのセクター、組織で動いていると限界があると感じている。以前フューチャーセンターに参加したことがある。その時、企業・銀行・学生・学校の先生も参加し、色んな人と話ができひとつの意見を出すということがおもしろい。フューチャーセンターが三重県のどこかにあればよいと思う。どこかと言えば「アスト津」がベストである。また、希望としてはNPO班が担うべきだと思う。

「美し国おこし・三重」も来年度で6年目で一定の区切り、役割を終える。まさにこの取組は、情報の受発信であり、地域を良くしていこうとの取組である。地域の絆づ

くりを応援していこうというとてもシンプルな取組であるし、また、NPO班と連携しながら進めてほしい。県内のNPOとの連携がこの「美し国おこし・三重」を進めるうえで不可欠だと思っている。

NPOの概念を見直す時期に来ているように思う。市民活動センターでも濃淡があり、市町の姿勢だけに留まってしまっている中間支援組織もある。情報の受発信の機能のあり方を考え直さなければいけないという声もある。

組織のあり方では農業でも同じことが言える。戦後食糧難を克服するために、国の事業でハード整備した農地を管理・維持するため土地改良区がその役割を担ってきた。今までのその役割であったが、今は施設の管理・維持だけではだめである。国は多面的な機能の支払を恒久的なものにしようとしている。これは日本型の直接支払い制度である。土地改良区の制度の役割を見直すべきであると考え。土地改良区は農業者の中間支援組織だと思っている。

連携とマッチングの話であるが、連携することは当然であるが、それよりも、障がい者の一人ひとりのスキルを上げるため、セミナー的なものを中間的支援組織で担うべきである。スキルを上げないとマッチングさせられない。レベルの差はマッチングしにくい。

情報の受発信と連携で重なるところがある。今年から「命のキャンパス」を立ち上げた。大学生達にイベントに来てもらった理由を聞いてみると、他のイベントでのイベントの告知が有効だと分かった。SNS、フェイスブックの活用はある程度、効果的であった一方で、ソーシャルメディアは期待す

るほどそんなに広がらない面もある。

フューチャーセンターはひとつの形としてはモデルになると思う。「美し国おこし・三重」の拡大座談会はどの地域でも好評である。「ギブ&ヘルプ」という手法を開発して、助けてもらいたいことと与えることができることをWIN、WINで行う。そういう手法を活用して「アクティブシチズンセンター」みたいな名前でスタートさせ、「美し国おこし・三重」で育った700組近いパートナーグループとNPOを重層的に重ねあわせながら、「三重アクティブシチズンセンター」を各地域に設置してサロンマネージャー的な人を置き、県が関与することを提案したい。

障がい者の芸術の話もあったが誰かが引っ張っていかないとレベルは上がらない。志摩市にも世界的に注目されている障がい者の施設で芸術的なレベルが高い取組みをしているところもある。三重は今、非常にいいポジションに来ていると思う。

企業の社会貢献、ボランティアも地域を想う方々が集うべき時代なのかと思う。多様な方々が集まる場所は何処にあるのかを考えた場合、拡大座談会もそうだし、フューチャーセンターもそうである。このような場を各課が活用し、色んな方々が集まる場に入っていきような感覚は持ってほしい。

多様なセクターが集まれる場所が必要である。企業はCSRをしたいがどうしていいかわからないという意見がある。地域の人の意見も聞きたいがどうしたらいいかわからず、とりあえず、寄付したり、協賛に乗っかってたりしているだけだ。また、多様な主体が集まると言語も違うので、言語を集約

して方向性を示すような人間が必要である。地域で眠っているファシリテーター・コーディネーターと連携すれば、フューチャーセンター・アクティブシチズンセンターができるのではないかと考えている。

水土里ネット立梅用水では、今年から学校教育との連携、コミュニティスクール事業を本格化しようと考えている。今までの連携ではなく、継続性が持てる取組をしたい。子ども達をきっちりと育てていくことが大事である。地域にとっても大きな投資であるという考え方から行う。地域の課題を明確にし、遊休農地を活用し、大豆を作るなど、地域の方々のつながりをつくる。子どもたちの意識で農地を守る取組を始めるなど、明確な目標をお互いが共有することが大事である。今あるものをうまく利用しながら、連携やマッチングを進めていくことができるのではないかと。

まとめ（ファシリテーター）

委員の皆さんは、まだまだ活用できる場やノウハウがあると思う。是非それを今後の中間支援組織の「機能」や「あり方」について、今後も意見交換をしていきたい。この場は結論を出す会議ではないので、現場の声を意見交換しながら、各課が課の中へ持ち帰っていただくことが大きな主題であるので、委員の意見を各課へ持ち帰って役立てていただきたい。



次回の開催予定

4 今後の対応

今回委員から出された意見を今後の施策や事業に反映することにより、「県民力を高める絆づくり協創プロジェクト」を推進していきます。

なお、平成26年度第1回推進会議は平成26年6月下旬から7月上旬に開催する予定です。